

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

僕の／私の3周目

【作者名】

寝暗幻想曲

【あらすじ】

荒谷蓮は元演操者だ

その事実だけは変わらない

その罪の炎は決して消えない

それでも、友に託された思いがある

それでも、妹に残された憶いがある

二度と消えることのない烙印を背負って俺は進む

まあ差し当たってはとりあえずあのバチカン野郎どもを潰すこと

から考えなくちゃならないらしい

なにせうちの可愛いご主人様の命令だからな

世界を救うのはそれからでも、別に遅くはないだろう？

お約束ですがいつもどおり意味わからないほどの不定期更新が
予想されます

この小説には以下の成分が多量に含まれています

- ・カツエかわいいよカツエ
- ・カツエたんprpr
- ・カツエ！カツエ！カツエ！カt（ry

2 週目 3 週目

「ああ、僕の勝ちだね。全く、余計な手間をかけさせないでくれ」

辺りには破壊の跡ばかりが目立つ。

始めに存在していたであろう森の存在は既に跡形もなかった。

互いの能力が強大すぎたせいだろう。

確かにアスラムキーナ機巧魔神同士の戦いは周辺に被害を撒き散らすものだが、ここまでアスラムキーナの被害を叩き出せる強度の持ち手はなかない。

アスラムクライン機巧魔神そのものの強力さもあるが、対峙するハンドラー演操者が両方魔神相克者であることも大きな要因だろう。

「秋希さんは……助けられなかったんですね。部長はなんでそれでも

「残念ながら諦められないよ。そう、諦められない。僕はもう一度秋希をこの手にするまで、止まるわけにはいかないんだ。ここまでのことをしたんだ、わかるだろう?」

ともあれここに雌雄は決した。

正義は必ず勝つという言葉があるが、誰かが言うには勝てば官軍負ければ賊軍、つまり勝った方こそが正義なのだからそりゃまあ正義は必ず勝つな、と思考して自嘲する。

これじゃあこの最後の戦いに勝利したあのネクラ野郎が正義だって認めてるようなもんだ。

確かに俺の刀は折れ、智春の黒鐵・改もボロボロだ。嵩月もこれ以上魔力を使えば非在化が進行するだろう。

それでも俺たちにはまだ決して折れない心がある。

ここまで数々の苦難を乗り越えてきた俺たちは、こんなところで諦めるわけにはいかないんだよ。

この戦いにさえ勝利すればきっとこの世界は救われる。

あのネクラ野郎が起動させた超弦重力炉も時期に停止する手筈だ。あれさえ止まって部長も止まれば、それだけでハッピーエンド。なんて簡単なんだろうな、笑いしか零れてこないぜ。

だからこんなところでブツ倒れてるわけには行かないんだ。智春のやつも満身創痍の黒鐵・改に最後の―撃を撃たせるつもりみただい。

濃密な魔力が黒鐵・改の周りに漂い始めた。

「それが君たちの最後の―発、か。それを打ち破って僕はまた秋希が生きられる世界を探しに行くとするよ。もう僕の邪魔ができないようにしてあげよう」

余裕綽々な部長の手振りに合わせて、鋼も魔力をその右腕に充満させ始めた。

その魔力量は黒鐵・改よりも数段上だ。智春は唇を噛み締めながら猶も魔力を充填し続ける。

嵩月もペルもこれが最後の対峙となることが分かっているのだから。

その魔力を惜しげなく送り込んでいる。

ついに両者の機巧魔神が慟哭するクライニンググアスラ魔神の状態へと入った。

本来ならば戦闘が開始した時点で行っているべきこの状態に今更なっているのは、部長の戦術のせいだ。

実際智春が慟哭する魔神へと至ろうとした時に、部長は鋼が素の状態なのに殴りかかってきたのだ。

全くあれほど秋希さんが助からないと慟哭していた直後だったのに、抜け目なさすぎる判断だ。

不意を突かれた智春は循環を絶たれ、そのスペック差を責められ今敗北間際へと追い詰められている。

当初からこの状態で戦闘することができていれば、炎と氷という相性上有利に立つことはできたはずだし、もしかしたら死闘の末に智春が勝利していたかもしれない。

だが、今の俺たちに出来るのは最後っ屁の黒の拳撃による一撃と、それに隠れた演操者を狙った俺の居合一太刀のみ。

さつき智春からアイコンタクトされた。

あれはタイミングを合わせて突っ込めってことだろう。

鳳島は嵩月が請け負っている。

これが最後のチャンスだ。

体を起こす。

この一撃を決めることだけを考える。

思えば遠くまで来たもんだ。

昔はあいつと楽しくやっていけたらそれだけでよかったのに……いつからか他にも守りたいものが出来ちゃった。

こいつらを、科學部の連中を守るため、この世界を守るため、あいつの思いに応えるため、俺は負けられない。

時は来た。

鋼と黒鐵・改の周りの風景が歪み出す。

両者が右腕を深く引き、拳撃の体勢に入る。

そして、次の瞬間俺は、

「しゅん、あとは頼んだよ蓮」

黒鐵・改が、ペルセフォネが、嵩月が、智春が、超重力の塊に飲み込まれる姿をその目に焼き付けた。

……「しゅん、どっだ。

次に目覚めた時、そこは室内だった。

自身は布団の上に寝転がり、扉の前には誰かが立っている。

その姿を認めた途端、俺は呼吸を忘れた。

そこに立っていたのはあいつだった。

戦いの最中、魂をすり減らし消滅してしまったはずの妹がそこに立っていた。

妹 妹？

そこに立っていたのは紛れもない俺の妹だ。

薔薇輝ロドワイや鋼との戦いで傷つき、魂をすり減らして消滅してしまったはずの俺の妹だ。

だが、ふと違和感を覚えた。

幼い。

そう、俺が記憶しているあいつの姿より幾分幼く見える。

シスコンだったのは自覚していたが、まさか死に際に在りし日の妹の姿を浮かべる程にはロリコンであったとは……自分が情けない。

それでもこの心地のいい夢を終わらせなければ。

俺はあの一瞬、負けたのだろう。

でなければあんな光景を見る羽目になった理由が理解できない。

人が擦れて潰れていく様を、それも親しい人が歪んでいく様を目の前で見せられた頭はまだ混乱しているようだ。

でなければ走馬灯がこんな長く続くはずはない。

あいつはさつきから扉の前に立って微かに頬に笑みをのせてこちらを眺めている。

あいつは何を言いたいのだろうか。

何も言いたくないのだろうか。

所詮は都合のいい夢だということか。

敗残者は去るのみ。

未練はここに置いていこう。

「藍」

あいつはただ微笑んでいる。

「俺は何も守れなかったみたいだ」

あいつは何も言わない。

「お前にあの時誓ったのにな」

ただ微笑んでいるだけだ。

「みんなは俺が守るって」

何も言っではくれない。

「お前が身を賭して手に入れた力を使って」

微笑みに綻びはない。

「それが俺に出来る精一杯だったから」

その口が開くことはもうない。

「クソ……お前をすり潰して、元演操者として自身をすり潰して」

天使のように微笑みを浮かべるだけ。

「精一杯やったんだ。なのに、俺ア負けちゃったよ」

なぜなら彼女はもう……

「クソお、悔しいなあオイ。ああ、涙が止まらねえよ。誰が未練を置いてくたって!? なんもん置いてけるわけがねえだろうが!? 俺アあいつらを守りたかっただけなんだ……それが、なんで、なんでこんなことになっちまったんだよおおおおおおおおお!!!」

俺の記憶の中にしか……

次の瞬間開け放たれていた窓から風が吹き込んだ。

「大丈夫だよ」

「え？」

今聞こえるはずのない声が聞こえた。

窓の外に広がる木々のざわめきが耳にうるさい。

「お兄ちゃんをよく頑張ったんでしょ？　だったら報われるはずだよ」

ああ、ついに俺の頭は許されたいがためにあいつの声を流し始めたのか。

あいつはゆっくりとこちらに向かって歩いてくると、ベッドの端に腰掛けた。

「それに、お兄ちゃん……さっきから寝ぼけてるみたいだから言っておくけど、ここは別に死後の世界とかお兄ちゃんの都合のいい妄想の中とかじゃないからね？」

窓から滑り込んできた葉っぱをシーツの上から拾い上げてあいつは言う。

……ん？　さっきから聞いていたら何か話がおかしくないか？

報われるはず？　俺は死んだんだろ？　だってじゃなきゃここはどこだよ。

困惑が顔に出ていたのか、あいつは仕方ないなあとはかりに笑みを

深めると、事情の説明を始めてくれた。

「いい？　まずはじめに説明すると、ここはお兄ちゃんの考えているようなところじゃなくて3周目の世界。お兄ちゃん達がいた2周目の世界が滅んで生まれた世界だよ」

「は？」

さっきから疑問符ばかりが頭の中を行き交っている。

多分傍から見ると、俺の上には巨大なクエスチョンマークが浮かんでいるのだろう。

または俺の頭の周りにいくらかの小さなクエスチョンマークが浮かんでいるかな。

そんなしょうもないことを考えるくらいには藍の言っていることは理解し難かった。

涙を流して首をかしげる男の図、シールドだ。

そんなことより、3周目？　2周目の世界は滅んだ？　じゃあ俺はなんでここにいるんだ？

藍は俺が何を考えているのか手に取るように分かるぞといった表情を浮かべている。

俺もお前が何考えてるのかよく分かるよ、顔に出やすいからな。

「話すと長くなるんだけど、今のところは簡単な説明だけしておくね？　まずは、あれは半年くらい前かな？　私が夢遊病に罹った時期があったんだ。周りからはただ普通に遊んでいるように見えてたみたいんだけど、私にはそのときの記憶がなかった。そのあとしばらくして、夢遊病から解放された時に目の前にあったノートで真実を知ったんだけどね」

一旦話を切る藍。

俺は今の話のどこがこの状況の説明になるのかさっぱり分からなかった。

もしこの時平時並に冷静だったならばここまで聞いただけで事情も理解できたのだろうが、あまりにも突然の事過ぎて全く頭が働いていなかった。

「ノートの中には世界の秘密が記されていた。私の夢遊病の正体、2周目の世界のこと。お兄ちゃん達が日々命懸けの戦いをしていること。全部2周目の私が書いたことだった」

そこまで聞いてやっと把握した。

俺の操っていた機巧魔神白金鐵しろこがねには規格から安定装置スタビライザが搭載されていた。

2周目の藍はその力を使って独断で3周目へと渡っていたのだらう。

大人しそうな見た目に反してお茶目なところのある我が妹らしい暴挙だ。

今日の前にいたら梅干をくれてやるところだった。

だが今日の前にいるのは3周目の藍なので自重する。

「2周目の私は副葬処女ベリアルドールっていうものになってしまって、お兄ちゃんのために日々身を削って戦ってるんだ、って自慢気に書いてたね。でも2周目の私は気づいちゃったみたい。私が3周目の私だということに、3周目が生まれるということとは2周目は助からないのだという結末に」

そうか、そうだったのか。

あいつが一時期とても沈んでいた時期があったのはそれが原因か。

「だから2周目の私は考えた。2周目が単独で助からないのならば3周目の世界からなら助けられるのではないか? って」

.....。

「待て待て待て待て、なんだその暴論は。一度滅んだ世界が元に戻る
とでも言うつもりか？」

「何を言っているのお兄ちゃん。お兄ちゃんたちだって2周目から1
周目の世界を助けようとしていたんでしょ？ それとやろうとし
ていること自体は一緒だよ？ ただ、対象の世界が滅んでいるか、滅
びかけかの違いしかない。第一さっきは滅びたって言ったけど、今の
2周目の状況は3周目からじゃ観測できないから滅んでるかもわか
らないよ？」

「いやいやそこは大きな問題だろうに……それにだ、俺らの場合は機
巧魔神という指針があった。だから1周目と2周目を一緒に救う算
段をたてられたんだ。2周目と3周目に一体なんの架け橋があるっ
ていうんだ？」

我が意を得たりとばかりに頷く藍。

どうやらこの疑問を引き出したかったらしい。

「お兄ちゃんだよ」

……さっきから俺は自分が実は馬鹿なんじゃないかと疑っている。

藍の言うことがいちいち一発で頭に入らない。

ちなみに俺が藍が馬鹿なんじゃないかと思うことはない。

藍が馬鹿なはずないし実際俺なんかよりよっぽど賢いしな。

それでだ、俺……？俺の存在を架け橋にするだって？

「あ、あとは色金だね」

「イロカネ？なんだそりゃ」

イロカネ……初耳の単語だ。

黒科學関連の用語は初見ではなかなかわからないような命名がさ
れているものが多い。

それでも俺が初耳なんてことは相当に珍しい類いの存在なのだろう。

それこそ点火装置イグナイターに匹敵するレベルでもおかしくはない。

こんな俺でも黒科科学は一定以上に修めていたからな。

とりあえず藍が言うことには2周目から来た俺とそのイロカネとやらが鍵ってわけだ。

うん、さっぱりわからん。

「色金ってというのはこの世界特有の物質かなあ、正確には違うけど。2周目の世界と3周目の世界の違いはたくさんあるみたいんだけど、そのへんの説明はまた今度ね？ とりあえず今はそういうものがあるってことで納得しておいて」

「ああ……それはわかった。ただ、そろそろ説明してもらっていいか？ 俺はなんで今3周目の世界にいるんだ？ 俺は死んだはずだろ。じゃなきゃあの時何が起きたって言うんだ？」

そう、あいつの考えてたことはまだよくわからないけれど、あいつが何を考えていたとしても俺がここにいる理由は説明できない。

なぜならあの時あいつは既に消滅していたからだ。

死人に口なし。

あの時一体あの場で何が起きたのか。

でも藍はそれを説明できるはずだ。

でなければここまで落ちて着いて俺の存在を認められるわけがない。

藍は事情をすべて把握しているのだ。

「別に私も全部を説明できるってわけじゃないよ？ その場に私がいなかったわけでもないし。でも、これだけは言える。お兄ちゃんも智春さんに飛ばされてきたんだよ」

「智春」……？」

そうか、なぜその可能性を考えなかったんだ。

黒鐵・改の能力は時空間の制御。

なぜ俺が3周目の世界にいるのか考える中で、一番最初に出てくるべき可能性だ。

余りにも混乱しすぎていてそんなことすら考えられなくなっていたようだ。

もう少しばかり落ち着こう……当初よりはマシになったとは思いますが、まだ冷静じゃないようだ。

「2周目の私が言うには、智春さんにはその話を前からしてたらしいよ？ お兄ちゃんに内緒にしてた理由までは教えてくれなかったけど、非常の時にはみんなで3周目の世界に逃げ込むんだって計画してたみたい」

「……それじゃあ、なんで俺だけがこの世界に？ みんなで逃げたんならここにみんないるべきだろう？」

そう、俺は智春たちが重力球に飲まれ挟まれていく様を見た記憶がある。

みんなで逃げたのならあの光景はなんだ？

まさか俺だけを逃がしたなんてそんなことはないはずだ。

だから、最後に聞こえた覚えのある声は幻聴だ。

あとを託した……？ 何を言っているんだ。

お前は主人公だろう。

すべてを救ってみせる英雄ヒーローだろう？

そんなところで諦めるなよ。

1周目の世界に行った時のように、ひょっこり現れてまた世界を救いに行くんだろう？

そうだろ、そう信じさせてくれよ智春……こんな妹一人守れないよ
うな男に後なんて託してんじゃねえよ。

お前が自分で救えばいいじゃねえか……なんで、なんで俺なんか
に、こんな無様晒した俺なんか託しやがったんだよ……くそお」

「お兄ちゃん……」

「……なあ、藍。もうひとつ教えてくれ。この世界の俺はどうなった？」

世界間移動の時に、移動先に自身と同等の存在があればその際にその存在は自身で上書きされる。

つまり……今自分の姿を見て気づいたが、俺はこの世界の俺の体を乗っ取ってここに存在しているというわけだ。

智春なんかはその辺に複雑な事情があるのか、1周目と2周目の智春が同時に存在するなんてことになってやがったが。

「……」この世界のお兄ちゃんは確かに上書きされたよ。でも、お兄ちゃんもそれはわかった。この世界のお兄ちゃんは生まれつき体が弱くて、もう長くなかった。だから私が全部を話したの。そして、それが世界のためになるなら俺は笑って消えられるって……それから二人でいろいろなことを話したの。今までのことこれからのこと」

……。

「だから、私たちは覚悟が出来たの。お兄ちゃんが気にすることじゃないんだよ。それに、お兄ちゃんはお兄ちゃんでしょ？ 多少生まれが違っててもそれは変わらないよ」

俺は……いつも藍にばかり負担をかける。

背負わせなくてもいいものばかり背負わせちまう。

一度それで取り返しのつかない失敗をしているっていうのに、また俺はそれを繰り返してやがる。

なんで藍がこんな儂げな笑みを浮かべなくちゃならないんだ。

今にも消えてしまえばさうなほど傷ついた笑顔なんて……なんで俺は浮かべさせてるんだよ。

俺は誓ったんだ。

藍を守るって。

みんなを守るって。

最低限の事情はわかった。

俺のすべきことも把握した。

3周目の世界だからうまくいくなんて確証はない。

俺は2周目の世界と1周目の世界、ついでに3周目の世界をこの手で救ってやればいらしい。

ああ、簡単なことだ。

この胸には誓いとみんなの想いが渦巻いている。

左手には消えない炎もある。

危機も一時的に去った。

ここからもう一度始めよう。

今度こそは俺が全てを守るんだ。

智春でも、あの主人公ですらもできなかったことを今度は俺が一人でやり遂げてやる。

みんなの手助けもない、紛れもない俺だけのチカラで。

ああ、でも、それも今目の前で泣きそつな顔してる女の子一人慰めてからだな。

世界を救うのはそれからでも、別に遅くはないだろう？

日 仏

「わー、お兄ちゃん見て見て！ まるでおとぎの国みたい！」

「ああ、そうだな。まあ、ヨーロッパの町並みなんてどこもこんなもんだろっ」

「ええー、お兄ちゃん夢がないよ夢が！ こんなふぜいあふれるじょうけいなんてなかなかないよー」

「その風情あふれる情景もこれから毎日見ることになるんだ。すぐに目新しくもなくなるさ。それにしても藍、よくそんな言葉知ってたな」

「ここはフランス、ストラスブール。」

「ここへは父さんの出世に合わせて引越すことになった。」

領事官であるところのうちの父さんは出世頭らしく、弱冠32歳にして副領事になり、この度ストラスブールの日本領事館で海外勤務をすることになったのだ。

藍は住み慣れた日本を離れることを嫌がったが、母さんが乗り気で、そのうえ俺まで賛成したもんだから、いやいやながら頷いた。

その割には飛行機に乗るときも、こちらについてからも上機嫌そのものなのだが。

「この前テレビでやってたよー。あ、そういえばこっちだとテレビも全然違うんだよね。うわー、ペケポンとかもう見れないのかあ」

「内容だけじゃなくて喋る言葉からして違うけどな。フランス語かあ、英語とかドイツ語ならわかるんだけどなあ」

俺がこの世界に降り立ってから一年が過ぎた。

俺が成り代わった当初は性格の違いなんかから父さん母さんには心配されたけど、体が丈夫になったことなんかもあって、いい方向に向いたんだと納得された。

おかげで最近結構自由にやらせてもらっている。

本当に最初の頃はひどかった。それはそれは過保護で……思い出
すだけで疲れるほどだ。

「お兄ちゃんはいいいね。前の世界で外国にいたことがあるんでしょ？ 私なんて最初から覚えなまいけないんだよ？ 人って生まれた時から聞いていた言葉が一番馴染むんでしょ、私知ってるんだから！」

藍が耳元で囁く。

両親に俺の事情は喋らないことに決めたのだ。

余計な心配をかけるし、彼らからすれば俺は息子であって息子じゃない存在だからだ。

不義理ではあるが、その方が彼らの精神衛生にはいいだろう。

いくら優しいヒトたちではあっても、いきなり黒科學やら悪魔やら世界の話をして、そのうえお宅の息子さんは消えました、なんて言われても全く整理がつかないだろうし。

話して拒絶されたりしたら大変だ。

こつちの世界ではまだ八つの俺が社会に放り出されても、何もすることはできないのだ。

だから、これは仕方ない対応だと藍と話し合って決めた。

自己中心的な考えではあるし、もしかしたら話したら受け入れてくれるかもしれない。

でもそれは我慢を強いることであって、違和感があっても悲しみのない今のほうがいいはずなのだ。

藍も俺もこれがエゴだと分かっている。

二人とも胸の内に罪悪感はあるけども、それを抱え込んで生きていかなければならないのだ。

「馬鹿言つなよ……俺だって覚えなおしだ。外国語なら全部同じよくなもんだと思つなよ？俺がドイツ語の習得にどれほど時間を割い

たか聞いたたらお前泣くぞ。英語を覚えるのすら手間取ったのにもう一言語なんてどれだけ……ああ、藍一緒に頑張ろうな。思い出したら泣けてきた」

そういえば、俺たち兄妹に外の世界を見せてやりたいんだ、とうちの父さんは言っていたが、俺自身はまだ2周目の世界にいた頃にドイツに留学していた時期がある。

黒科学の源流はドイツだからだな。

錬金術の流れを汲み、かのファウスト博士が存在を示した黒科学。その流れは脈絡と流れ続け、今もドイツを主流としてヨーロッパを中心に発展を続けていた。

最近はいギリスが本場となりつつあったようだが……まあ時代の変遷で源流が衰えるのも宿命だな。

おかげでドイツ語と英語だけは苦勞することなく話せる。

実は、今回の引越し先もストラスブルと聞いていたからドイツ語が使えるんじゃないかと少し期待していた。

それが蓋を開けてみれば、街中では全くと言っていいほどドイツ語が聞こえてきやしない。

たまにわかる言葉が聞こえてきても精々英語だ。

フランス語ばかりでこれから苦勞することが目に見える。

なぜまだ十にも満たない歳ながら、四言語も操れるようにならなければならぬのだろうか。

前の世界の時ですら一八で三言語だぞ。

それも血反吐を吐くような努力でやっと話せるようになったものだ。

少しばかり努力しただけもう一言語習得できたら苦勞せんわ！

「えへへ、フランス語かー。ちょっと楽しみだなー」

……どうせ我が家の妹様はすぐ身に付けるんだろっけどな。

藍の頭の良さは身にしみている。俺が留学してる間に苦勞して習

得したドイツ語を、日本に帰ってきた途端に藍から聞いた時の記憶は今でもトラウマだ。なんで俺みたいに身につけなきゃやっていけないとか、そういう縛りがあったわけでもないのにあんなに簡単に喋れるようになったのか、当時の俺にはさっぱり理解できなかった。

おかげで少しの間仲がこじれることになってしまったし、そのせいで藍は体を失った。

あの時俺がもっと大人だったならば、きっと藍も俺も今頃もまだ一般人として過ごすごうができていたのだろう。いや、それには少し語弊があるか。きっと黒科の研究者としての一般的な人生を過ごすことができたのだろう。

今では藍と俺を比べることはない。藍は天使だし、俺は多少大目に見ても秀才だからだ。そのことを嫌というほどに味わった。俺が藍に勝てる分野は少ない。だが、だからこそ俺が藍を守ってやらなければならぬ。

2周目の世界の時みたいに、俺が不甲斐ないばかりに藍に重荷を負わせるわけにはいかないのだ。

「よし、家に着いたぞー」

少し先を歩いていた父さんが告げる。

どうやらいつの間にか新たな我が家の前までたどり着いていたらしい。

又オフ・ロドルフ・ルスという駅で ترامを降りて少し歩いたポリゴン地区に新居はある。

なんでまたこんな辺鄙なところに居を構えたのかはわからないが、どうせ子供たちがいい空気を吸わせたかった、とかそんな理由だろう。もっと街中でよかったのに。

「わー、新しいおうちだー」

藍がはしゃいでいる。

うちの妹は3周目の知識があるせいも賢いせいも、下手な大人よりもよっぽど大人びているが、こういふところは歳相応だ。

普段から落ち着きすぎている俺が隣にいるせいもそんなに目立つてはいないが。

今日ははしゃぎ疲れただろうから、どうせ一通り家の中を見て回ったらすぐに眠ってしまうだろう。

流石にどんなに大人びていても所詮六歳児ということだ。

「ふふ、みんなよく来たわね。さあ上がって頂戴、もちろん靴は脱いでね」

出迎えてくれたのは一足先に家に着いていた母さんだ。

これから暮らす家なのにその中身を全く知らないで何が主婦か、と謎の女気を見せて俺たちより先に日本を発ち、内装をいじったりだの食材を安く買えるスーパーを探したりだの、主婦力全開でここ一週間を過ごしていたそうだ。

全く理解できない。

「それにしても家の中は普通だな。もっと日本と違いがあるのかと思ってた」

「うーん、最初はちょっと異国情緒溢れる感じだったのだけど、日々を過ごすならこっちの方がいいかなって。あんまり慣れない環境にずっといるのも気疲れしちゃうから」

まあ全く理解できないなりに、「こちらのことをよく考えていてくれる」といふことはわかる。

「こちらのことをよく考えているからこそ色々とやりにくいことになることもしばしばなのだが。」

「わーい、いいおうちだね！ 私このおうち大好き！」

早速家の中を走り回ってきた藍が戻ってきた。

玄関を抜けてすぐがリビングだったのでそこに一週間ぶりに家族四人が揃う。父さんは藍に付き合ったからか多少息が荒いが、まあ問題ないだろう。

「ハアハア……さて、今日からここが我が家だ。今までとは全く違った生活になるが、まあ楽しくやっていこうじゃないか」

そうニヤリと笑いながら言う父さんは、なんだかいつもより格好良く見えて、横目で母さんが頬を染めてるのを見ながら、ああ大人なのはよくまあ格好つけるもんだな、と思った。

だからお願いだから、息が整いきってないのに眠たそうにしている藍にふらふらと歩み寄るのはやめてくれ。変質者にしか見えないから。

そうやって俺たちのストラスブルでの生活は幕を開けた。

このストラスブルでの生活が俺の人生をまた左右するわけだが、それはまたもう少しあとの話。